

K-9



通俗正教
傳道小書
光榮の王

269
63

明治四十五年東京正教本會編輯所

特49
814

摘要

〔一〕 光榮こうたいの王おう 天てんの父ちち。

〔二〕 光榮こうたいの王おう 主しゅ イススハリストス。

〔三〕 光榮こうたいの王おう 上帝みみ聖神せいしん。

以上

四十三

明治
45. 3. 12
四ノ交

通俗正教
傳道小書

光榮の王

〔一〕光榮の王 天の父。

『此ノ光榮ノ王ハ誰ゾ、萬軍ノ主、彼ハ光榮ノ王ナリ』(聖詠二十)。

茲こゝに光榮こうえいと申まうすのは、普通たいていの語ことばで申まうせば、光ひかり榮さかえと云いふ様ような者ものですが、原語もとことばの意味いみはいと尊たふとくいと正ただしくいと儼むごかなことと、とても一口ひとくちに言盡いひつくすことの出來できない勿体もったいない有難ありがたいこととであります。其様そのような限りなく尊たふとく有難ありがたい王様おうさまとは、果はたして誰たれのこととでしやうか。此これが聖書せいしょの言ことばに茲こゝに先まづ掲かげられた大切たいせつな問とひであります。凡すべて世よの中に王様おうさまと申まうせば、勿も論ろん尊たふとくお方かたであります、一國いっこくの中で、王様おうさまほどいと尊たふとく儼むごかな者ものは、又またとありません。けれども此この王様おうさまも病氣びやうきに侵かされまゝ、罪つみも犯かします、時ときとしては政治せいぢを誤あやまして庶民しよみんに禍わざはひを及およぼすこともあります、大事だいじな先祖せんぞの社稷しゃしよくを亡ほろぼしてしまふこともあります。いくら萬歳ばんざいと申まう

しても、世に萬年の天子はありませぬ。どのやうな強國の天子も、死を免れることは出来ませぬ、秦の始皇が不老不死の薬を求めるときは全く失敗に了りました。どのやうな大國の王様も、死んで其死骸は腐れずにはをりませぬ。されば此世の王者も、尊いには相違ない、儼かなには相違ない。けれども此上もない限りない意味に於ては、未だ『光榮ノ王』と申すことは出来ませぬ。此世の王者は、萬民が仰いで、いとありがたいと崇め、固り我ら臣民は彼に忠義を盡さなくてはなりません。而して其王者を益々崇め、其位を益々尊くする爲には、何國の民も、皆天よりの佑けを祈ります、上よりの恵みを願ひます。天と曰ひ、上と曰ひ、固り彼の目に見ゆる大空のことではありません、大空には心もなければ性根もない、只空々漠々たる者です。そこで人々の祈りを聽納て、王者をも佑け、衆くの民にも恵みを賜ふ所の者は、實に此天よりも高く、天の上よりも大なる活ける上帝であります、乃ち我らの爲に恵み深き天の父であります。前に『此ノ光榮ノ王ハ誰ゾ』と曰ふ問に答へて『萬軍ノ主、彼ハ光榮ノ王ナリ』と申してあるのは、即ち此『天の

父』のことであります。天の父とは、此世界萬物を造り、我らを造り、各々に生命を施し多くの恵みを賜ふ所の眞の上帝であります。『萬軍』と申すのは、夥しい天使の群から取た語であります、初め上帝は、我らの目に見えない無形世界を造り、次に此様な有形世界をお造りに成たのであります。無形世界とは、乃ち天使の世界で、彼らは我らの様な肉体を持てをらず、只智慧と自由と能力を以てをる靈物であります。其眞の夥しいことは、天の星よりも多く、斯くおほせいありますけれども、各々秩序整然として、少しも亂るゝことなく、惟一の王の號令の下に、又一定の階級の間に、各々其職務を守り、善を行ふ有様は丁度立派な軍隊の様であります。それで之を萬軍と名づけ、又天軍とも稱へます。而して上帝は彼らの大元帥たり大將軍でありますから、之を『萬軍の主』と稱へられます。此の『萬軍の主』是こそ『光榮ノ王』でありまして、其生命は、世のなき始めより、永遠の世に亘り、其力は全能と申して、何事でも出来ないことなく、其智は全知と申してどのやうなことでも知らないことなく、其旨は全善と申して、凡て善ばかり、全く惡

といふ者はありません、そも眞の意味に於ての善は、上帝ばかりで、此外に眞の善と云ふ者はないのです(マトフェイ)。そこで我らも此上帝の旨に従へば、善、之に背けば悪となるのです。此上帝は、決して病に侵されることもなく、勿論一點の罪を犯すこともなく、死ぬると云ふこともありません。永遠に生きて、人々に生命を賜ひ、其靈魂に永遠の生命を賜ふ所の主であります。此様な上帝様こそ、眞に『光榮の王』であります、いと有難い光榮の王であります。

二二 光榮の王——主 イイヌス ハリストス。

『此ノ光榮ノ王ハ誰ゾ、勇毅能力ノ主、戦ヒニ能力アルノ主是ナリ』
(二十三聖)。

前章には『此ノ光榮ノ王ハ誰ゾ』と曰ふ問に答へて『萬軍ノ主』即ち『天の父』であることを申しました。今茲には同じ問に答へて『勇毅能力ノ主、戦ヒニ能力アルノ主』であると申し出てあります。即ち茲に光榮の王は、我らの主イイヌス ハリストスの

ことでもあります。それでは同じ光榮の王が二人あるのかと申すに、決して左様ではありません、確かに唯一人です。どうして天の父と主イイヌス ハリストスと、二人有て唯一人と申すのでしやうか。これは喩へて申せば、心と言と云ふ様な者でして、心は言と全く二つ別れた人ではありません。心に何か思へば、其が外に現はれて言となる否に論なく、其思想の中に言なる者が生れてゐます。而して其が外に言として現はるれば、愈々心の有様は明かに分ります。けれども此二つは、つまり一つであります。そこで聖書に主イイヌス ハリストスのことを『言』と申されてあります『太初二言アリ、言ハ上帝ト偕ニ在リ、言ハ即チ上帝ナリ』(イオアン)と。茲に言は主イイヌス ハリストスのことでもあります。此言は世界も何もない太初に、もはや有た、無限の世の先から有て、上帝父と一所に在て、其言即ち主イイヌス ハリストス自らも確かに父と同じ一つの上帝であること云ふ意味であります。そも眞の上帝には三の聖位と云ふ者がありまして、父と子と聖神と申します。此三つは唯一つにして三つ、三つにして一つ、何時までも何處までも別れることもな

く、混交になることもない一性一体の上帝であります。而して是の中父の聖位は前に申した天の父萬軍の主であります。子の聖位は、上帝の子、父の獨生子なる主イエススハリストスであります。今此れからお話し申さうとしてをる所があります。

ハリストス救世主が、亦光榮の王であると云ふことは、前に掲げました聖詠の言でも明かです。即ち『勇毅能力ノ主』といふ語は主イエススハリストスに當る語です。彼が萬民の救ひの爲に人性をお取りに成て、此世に在す時、一番に猛烈なるサタナ(悪魔)と闘ひて之に勝ち、其後も引續き、悉くの悪魔と戦ひて非常の勇毅と能力を顯はし、最後に十字架に釘うたれて此上なき苦みを忍び、罪人と、悪魔の攻苦に、唯善の力を以て悉く之に打ち勝ち地獄まで虜にして見事に凱歌を奏し、其輝く王たるの大能力を顯はされました。是れ聖詠者が『戦ヒニ能力アルノ主』と申した所以であります。尙他の預言者は、明かに彼を王と稱へて其世に臨む光榮の有様を詳しく預言してをります。其言に(ザハリヤ)

『シオンノ女ヨ、大ニ喜べ、イエルサリムノ女ヨ、祝へ、視ヨ、爾ノ王ハ

爾ニ來ル、彼ハ正義ニシテ救ヒテ施シ、溫柔ニシテ、驢即チ牝驢ノ子ナル駒ニ乗ル』

と申してをります。而して愈々此言が應じた新約の世に、イズライリの萬民は『オサンナ』の祝歌を唱へ、『主ノ名ニ因リテ來ルイズライリノ王ハ祝福セララル』と申しました(イオアン十)。

そもハリストス救世主が、光榮の王たることは、第一に其夥しき奇蹟、第二に死より復活の大奇蹟、第三に光榮の姿を以て天に昇り、父の右に坐し給ふに至つたことを以て、愈々明かに確かに證明する者である。けれども此小冊子には、此等の事項に付て、とても一々説明することが出来ないから、今は只前の預言者が申した言が應じて、主イエススハリストスが光榮の有様を以てイエルサリムに御入に成た一項に付てだけ、詳しくお話し申しましたやう。

ハリストス救世主が、これまでは親しく罪人に近づき、罪婦を憐み、すべて彼らを其罪と

滅びより救はうと致さるゝ爲に、光榮を隠しておいでに成たことでしたが、今度は聖福音者の所謂「我らの主イエススハリストスは、不法なる議會の卑劣的暗殺を避けて」故にイエススは是より明顯にイウデヤ人の中を行かず（イオアン十一）てふ時期は、もはや過去に今や復明顯にイウデヤ人の中に行かねばならぬ時期となりました。明顯に、最も明顯に、否最も森嚴にして彼らの中に進み行かねばならぬ時は來ました。故に主イエススハリストスは、其御門徒等と偕にエフライムの閑地を出て、再びピファニアにお出になつたのはたつた昨日のことでしたが、今日はもう多數の人群で御身の四周を取巻かれ給ふことになりました。それはイウデヤ人の爲に重大なバスの祭が近くなつたについて、地方のイウデヤ人は、イエエルサリムの首都に參らうと思ふて大勢群をなして出掛けましたが、主イエススハリストスとイエリホンの邊から同行して來た彼らの群は、主がピファニアに御留りになつたのを見て、直に其由をイエエルサリムに行て報知たからです。この報知を受て都に在た衆人は、早速にピファニアに出掛てかの有名なる大奇蹟者（イエススハリストス）を

見たいと思ひました、又彼と共にラザリをも見たいと思ひました。奇を好むは人情の常であるのに、世の始めこのかた誰も皆死んでそれきり復此世に還つて來ることができないのに、彼ラザリは死後四日も經て、イエススハリストスの大奇蹟に由て他界からまた此世にかへつて來たといふことであれば、斯く多勢の人々が、現在その復活者を見たいと望むのも無理ではありません。が其中には、心からこの絶世の大奇蹟者を慕ふて敬意を表する爲に來た者もあれば、隱密にイエススハリストスの狀況を探偵して不法の議會に告發せうと思ふて來た者もあり、又只一片の好奇心に驅られて來た者もありで、丁度十人は十色といふ様な色々な感情を抱いて居つたことでしやう。

が多くのイウデヤ人は、是時まさか主イエススハリストスが、イエエルサリムに御入りになるだらうとは想はなかつたでせう。なせなれば彼處には主の非常な大敵が有て主に對して恐ろしい大難を企て、居ることを知てゐましたから。然れども主は是日（ピファニアに到着の翌日即ち今日の日曜日）愈々イエエルサリムにおいでになると云ふことを知て、彼らは大

に意外の思ひをなして喜びました、實に意外の事です。主がかくも意外の御出發をなし給ふたのは、御身の爲には固り意外でもなく、全く上帝の預定の時が來たに於て其御門徒にも敵などにも何時までも御身の聖職について惑はせることを欲し給はず、乃ち茲にはツキりと御身の資格と目的とに付て、全イウデヤ人の目前に首都イエルサリムに於て斷然たる宣言を與へ給ふの聖意に出たのです。大約三年以降辛苦艱難の中に人々を教へ善行と奇蹟を施したまふた大預言者が、愈々御身自らメシヤ即ちハリストスとして、公然とイズライリの子に顯はれ給ふことは、主の門徒は勿論 苟も心あるものゝ大旱の雲霓管ならず日夜待ち望んで居た所です故、此日主が毅然としてイエルサリムにおいでになるのは、主に心を寄する彼らの爲には、其喜びの大なること實に名狀の外で、主がビフアニヤを出發し給ふと直に、多勢の人群は押合ひつゝ、打續いてお伴を致しました。

斯の賑かな一大隊は、漸く進んでビフアギヤといふ一村に對面ふ途に着きました（橄欖山の北に在り）。其處からは、もはやイエルサリムが近く見えます。これまで随分遠い所を旅

するにも、常に歩行たまふた主が、今や此程近い旅行に乘馬を欲し給ふのは、一の異常でしたが、其乘馬は通常の馬でなくて、これまで決して人を乗せたことのない若驢を求め給ふのは尙一の異常です。而して之を求め給ふ方法については、愈々異常の舉動です。乃ち主はそこに二人の御門徒を呼んで「汝等は對面の村に往てそこに入ると驢馬と共に若驢の繫いであるのに出會ふであらう、若驢は乃ち人が未だ乗たことのない驢子である、それを解て我に牽て來い、もし汝等になせそんなことをする乎と問ふ者が有たならば、主が之を求め給ふのであると答へよ、されば彼は直に之を遣はすであらう」と仰せ出されました。此は固り睿智なる主の特別のいみある御命令です。けれども當時御門徒らは更にわかりませんでした、只主の命令の儘に對面の村（即ちビフアギヤ）に行きました、所が果して一々主の仰せ出された通りのことでありました。彼らは主が預め仰せられた様に、一たびは人から『なせ其様ことをするか』と詰り問はれましたけれども、又主のお言の通り『我が主の御用である』ことを答ふると、持主なる農夫は、難なく之を承知して其まゝ驢馬も若

驢も彼の門徒に遣はしました。

此際イエルサリムの方角では『彼の死後四日も経たラザリを復活した大預言者がおいでになる』といふことを傳へ聞て、来て主をお迎へする人民は、益々多勢になりました。其中に二人の門徒は、主の命令の通り二匹の動物をつれて歸りました、而して主を愛する門徒らは、自分の外衣を脱で若驢の上に掛けました、此は主の御乗に便利にするのと、自分の敬意を表するがためです。主が高く此驢の子に乗り給ふと、今まで多くの人の蔭で主を見る事ができなかった者も、よく主のお姿を拜む事ができて満足しました。此大なる一隊は、別に金モールもなく、錦の御旗もなく、至ッて質素なありさまでした、けれども一種凜として侵すことのできない崇高神聖の風采がありました。其は此大預言者大奇蹟者たるのみならず、至大なる上帝の子ハリストスなる者を載せていと従順に行く者は、戦亂の用なる馬にあらずして、大平の徴なる驢馬であるのみならず、古代の例に神聖にして重大なことに役ふ動物は必ず未だ軛を負て御せられたことのない者を取て使ふた通り、

今至大なるハリストスは未だ一ども軛を負はされぬ驢の子を使ひ給ふたことにあらはれて居ます。(バレステナ地方に於ては、古から戦争の時にだけ馬を使ひ、平素大平の時は、驢馬又は騾馬に乗ることソロモン王即位の例にも見え(列王記上一の三、四十四)、神聖を要することに未だ仕事に使はれぬ家畜を撰んで使ふことは、上古横死者ありたる時の處置の例に見ゆ(復傳律例十)の三)此は即ち聖預言者ザハリヤが、大約四百年も以前に申して居た預言の成就したものです。其言に『シオンの女に告ていへ、爾の王は爾に臨むに溫柔にして驢馬と若驢に乗る……』とあります(ザハリヤ九の九に、首の一句はイサイ)。此は神靈的王國即ちメシヤの國は、純ら溫柔平安にして開かれる者であるといふ状を象つた預言です。

我らの主イエスス ハリストスの此様な儼かな有様を只外形上に見れば、いかにも主は其多數の民の輿望を容れてイズライリ王になり給ふかの様に思はれました。故に多數の民は、其心を喜びに満たされて様々なしかたを以て主に厚き敬意を表しました。即ち或者は櫻欄の枝を伐採て、或は之を道に投げ、或は高く上にさしあげ、又或者は自分らの外衣を

脱で主の御通りになる途に存て一層厚情を顯はさうと致しました（イウデヤ地方では、國王や大將が凱旋の時に、衆多の人民は之を祝ふて樹の枝や、花や、菓物などを其途上に投げる風がありました。殊に櫻欄の枝は、丈夫で奇麗な徴として居ました故、之を取て主を迎へるのは、大に彼を尊み喜ぶ表現です（レビ廿三の四）又衣物を脱で途上に布くのは、一層人に厚情を表する外現でした（列王記下九の十三に見ゆ））官に此様な盛んな歓迎は、昔に於てアレキサンドル大王がイエルサリムに來た時と、アグリッパ帝を此都に款待した時にも有たさうですが此迄大工の子として侮られナサレト人と云て蔑れたイエススハリストスが、今や此様な王者に等しい歓迎款待をお受けになるのは、實に異常な出來事でした。

此一大隊は且つ喜び、且つ行きつゝ、途には衣物、手には櫻欄の枝、而して口にはいと面白き聖王ダビドの聖詠を歌ひました。其は聖詠の中から最も直接に今の此事をいひあらはす所の一句です、即ち『ダビドの子にオサンナ、主の名によりて來る者（イズライリの王）は崇め讃らる、至高きにオサンナ』と唱へました（聖詠百十七篇）の廿五廿六）『オサンナ』とは、エウレ

イ語で直譯すれば「救ひ給へ」又は「助け給へ」のいみで、イウデヤ人は此言を以て祝ひ慶びの呼聲として居ました。『主の名によりて來る者』とは、聖福音經に（イオア五）、「主が「我は我が父の名を以て來る」と仰せられたのと同義で、主上帝から遣はされた特別至重の大使といふこと『至高き』とは、上帝全能者と衆天軍の儼かに在す所で、今此儼かな一隊で歌ふ所の『オサンナ』は、實に斯様な至高き所までひく讚美の聲です。

やがてエレオン山の上にさしかかり、イエルサリムの高い聖堂や、麗はしい景色を一目に眺めらるゝ高所に立てば、此大なる一隊は、いよゝ喜び勇んで歡聲沸く如く、枝と花との數はますます多く、此にも彼らの外衣は投げられて山路の草を蔽ひ、『オサンナ』の歡呼は、いよゝ高く、アンナ、カイアフアの官邸よりも高く、アントニイ城堡の高塔よりも高く上りて、至高きに絶叫されました。

此は皆不幸なる亡國イウデヤの人民が、其先祖ダビドの國を復興してイズライリの國威を天下に輝かしたいといふ愛國の熱心から出たのです。此大預言者大奇跡者たるイエスス

ハリストスこそ我らの熱望を容れて我が國を異邦の軛から救ふて下さるに相違ないと思ふ愛國心から出たのです。惜いかな、彼らは政治上の滅びよりも、道德上の滅びは、一層恐ろしい禍であるといふことには氣が付きませんでした。彼らは若も先に道德上に壞亂て公義なる上帝の義怒を招かなかつたならば、勿論政治上にも滅びることとはなかつたであらうに、彼らは之を悟りませんでした。けれども彼らの愛國心は、今日流行の偽愛國者の様な流儀ではなかつたのみならず、此様な歡呼は、實に上帝照管者がイエルサリムと全イスラエリ國民の心をしてメシヤ即ちハリストスに向はせうとはかり給ふ照管の致す所です、故に主イエススハリストスは彼らの歡呼を斥け給はずに進まれました。さうすると兼て主を嫉み憎んで居た所のファリセイ人らは、例の不法議會に忠を盡すがためにさきから探偵のつもりで多勢の中に混つてゐましたが、人民が此盛んな歡呼を以て主を光榮するのを見て、頗る不愉快に感じました。そこで主に丁度忠告の様に見せかけつゝ、勸告して『教師よ(あの様なことを)爾の門徒に御差止なされた方が宜しいでせう』と申しました。其は

御身の爲にも、國民の爲にも、ケサリの政府から嫌疑を受けて容易ならぬ災難に遭ふから、よされた方が宜しからうといふみを以て勸告しました。主は此様な偽善的忠告に對していと味ひある言を引てお答へになりました。即ち『若も彼らが黙つたならば石が號呼であらう』と仰せられました(此は民間の諺で、人民の爲に何か重大な事件が起つた時はとも彼らをして黙らせることができない、若強て黙らせるならば石の様な心も口もない物までが聲を出して事の重大なるを想はせるといふいみです。アワクムの預言にも之と似寄た言があります、『牆間の石は叫びて磚と梁とは將に之と應せん』(アワクム二)の十一、)即ち全知なる照管者の預定する所はどうでも此通りでなくてはならぬ。今や萬軍の主が上帝の預定を成就してイスライリの迷へる羊を恤む爲に敵に凱歌を奏して其聖殿に入るのに、心と口とある者がどうして此上帝と其遣はす所のメシヤを讚歌はずに居られうか一といふみを以て、暗にかの偽善者輩を責め給ふたのです。

其からエレオン山を下り坂となつて、ゲフシマニヤの村に續く路に來ました。此はもは

や愈々イエルサリムのまちに近い。イエススハリストスはこゝに、暫く駒の蹄を止めたまふた。而して其今までの麗はしかつたお顔は、忽ち變つていと憂ひの色があらはれました。それで是時主の傍に近くあつた者は、此たゞならぬ御様子を見てしばらくオサンナの呼聲を中止しました。あゝこのとき主は、果して何を感じたまふたのでしやうか。其は外ではない、今まで勇ましく呼ばれた民の『オサンナ』の聲は、僅か五日の後には『之を磔にせよ』之を磔にせよ』と呼ぶ魔の聲と變ることを御存じであるのみならず、今主は、此山麓から近くイエルサリムの街を見渡して其中に生命の氣がないといふいと憫むべき状況を御認めになつたからです。即ちイエルサリムの民は、罪に溺れて上帝に背き、生命の主たるハリストスを棄て、自ら禍を招くといふ状況を洞見し給ふたからです。實に彼らはこれまでに上帝から幾度も預言者を以て報せられ、上帝の夥しい恵みに浴して居ながら、其遣はされた贖罪者を棄て、街の外に擲出すとは言語道斷でござります。而して彼等は其來世に於て禍に遭ふのみならず、今世に於ても甚しい大難に遭ふことを自らは何も知らずに斯世の肉慾

罪業に耽つて居るのを見れば、滿身是れ愛と憐との主は、どうして之がために心を傷められずに居られませうか。宜矣、此時主イエススハリストスのお顔は、丁度青天白日に俄かに叢雲が起つたやうに憂ひ給ふたのみならず、やがて涙の雨がハラ／＼と兩眼から注がれたこと。されど救世主ハリストスは、固り自ら生命を捐て、萬民を贖ふが爲にお降りになつたのである、そこで此時特に悲み給ふたのは、御身の悲むべき運命の爲でなく、寧ろ救世主たる御身を棄て、悪魔に従ふイエルサリムの打毀さるゝ不幸を預想て泣き給ふたのです。故に主は涙と共にいと感動すべき聲を發して、イエルサリムに向つて仰せられました『あゝ爾は是爾の日に於てだも、爾の平安に關はることを知つたならば幸で有たらうに只此事が今は爾の目にかくれて居る（視よ幾もなく）爾の敵は壘を築き、爾を攻圍みて爾を困しめ、且つ爾と爾の子女とを撃滅し、石をも石の上に遺さぬ日が来るであらう、それは爾が（上帝の）爾を顧み給ふ時を知らぬからである』と。實に此痛ましい預言は、此お言の後三十六年を経て應じました。即ちハリストスの降生からは七十年後のことですよ。イエス

サリムの城は、ローマ人の爲に攻圍まれて、城中の民は兵糧攻に逢ひ、燒撃にされ、目もあてられぬ修羅の巷となつて、丁度主の預言の如く一つの石も石の上に遺らぬ焦土となりました。是皆斯人民が頑として悔改せぬ爲の天譴です、上帝がイウデヤ民を顧み給ふの日を知らぬ自業自得です。(茲に『爾の平安に關はる事』とは、やはり『爾の救ひにかゝはること』といふいみで、特に之を『平安』と仰せられたのは、イエルサリムといふ言が譯すれば『平安の城』といふいみですから、乃ち彼都の名に應じて用ひられたのでしやう。乃ちイエルサリムが果して其名の如く平安を得るには、平安の王たる上帝のハリストスに救はれて先づ天と地との和睦ができる道につかねばならぬ、此事を務めるが爲には今是日に於てもまだ遅くはない、急ぎ悟つて悔改るならば、彼らは遠く來世の難のみならず、斯世の難をも免れることができただであらうに、彼らの頑冥なる途に之をなさずに自ら滅びの途を撰びました。主のお言に『今や爾の目に隠れて居る』とは、即ち是です。彼等は全く靈魂の盲となりました。)あゝ斯までも已が同胞國民の不幸をなげき、已が國家の前途を思ふて

涙をそゞぎ給ふ主イエイススハリストスに、どうして愛國の念がないといはれましやうか。彼に若國家の事についての思想がなかつたならば、此様な愛國恤民の現象は、果して何處から出て來ませうか。昔者ファリセイ宗の輩が、彼を誣告して『國家の害をなすものである』と申しましたが、今や又僞愛國の輩が同じ誣告の『國害論』を唱へます。上帝と眞理とに敵する魔鬼は、何時も變らぬ姦詐を以て來る、さてもあさましき限りなるかな。他し言はしばらくよし、是から愈々主イエイススハリストスのイエルサリム城内に御到着になつた光景を御話致しませう。

親の心を子は知らず、貧に泣く父に兒は錢を求め、病に泣く母の傍に兒は嬉戯て躍る。頑是なき孩提なれば、是非もなし、されば今救世主の胸中には、如何に深き哀痛を湛へさせ給ふやを知らずに、只欣び勇む多くの人民は、主が愈々イエルサリムの都に御着になる頃は、愈々多きを加へて宛然茲に人山を築かれ、人波の漲る雜沓を來しました。そこで『街中舉て疎動したてふ聖福音者の報道は、實際でござりました。それはイエルサリムの街内に

居るものは、議會の御尋ねものとなつて居るイエスス。ハリストスがまさか此様にして自ら出て來るとは夢にも想ひませんでしたから、してみると、かくおごそかに盛大な入城をする者は誰であらうかと想像に惑ひました。そこで『此れは誰であるか』との質問は一番に此一行に向つて提出されました。するとお伴のものはいと得意顔に喜び答へて『此こそナサレトの大預言者イエススである』と申しました。而して彼がラザリを甦した大奇蹟者であることを告げました。

目的のイエエルサリムに入つて先づ落着く場所は聖堂でした。此は勿論上帝の子なるイエスス。ハリストスに最も當然のことです。乃ち彼は茲に自ら上帝の子たる大權を以て此の堂の整理すべき所を置せうと思はれましたが、其中にかねて聖堂の傍で参拜者の恵みを待受てゐる盲だの、跛者だの、其他さまざまの不具者は、争ひ來て上帝の堂の眞の主なるハリストスについて各々恵みを受けました。即ち盲は目が明き、跛者はよく立ち、病者はなほされた。此様な多くの奇蹟に由て、衆民の『オサンナ』の歡聲は、又又聖堂の内外に高く

響きました。殊に一層耳を聳つべき歡聲は、幼童らの呼聲です。お祭を樂んで待つことは殊に幼童らの何處も同じ幼心ですが、是時聖堂に寄集つて居た群衆の幼らには、同じ大人らのなす所に倣ふて、手に櫻欄の枝を打ふりつゝ、口々に『ダビドの子にオサンナ』を唱へました。(イウデヤ人は張幕節に一家擧て此聖詠を歌ひます、故に小兒でもこれまで聞きなれてよくおぼえて居ました。(時に兼て群民の歡呼を以て忌々しく思ふてゐた祭司長と學士などは、今また小兒までが主イエスス。ハリストスに歡呼を上るのを見て、ますます心持悪く思ひました、一は悔りの心を以て一つは怒りの念を以て、乃ち彼らの中ある者は主イエスス。ハリストスに向つていひました『爾は彼(小兒)らのいふ所を聞きませんか、此は爾の爲に名譽でもありませんまい』と。主は直に之に答へて『汝等は聖書に(聖詠の預言に)『我は嬰兒と哺乳者との口に由て讚美を全備ふ』とあるのを未だよまぬか』と仰せられました。此聖詠のいみは、上帝全世界の睿智者の光榮威徳がどこまでも行渡つて大人賢者のみならず、立つ子、匍ふ子に至るまで、上帝の恩寵を以て讚歌を上つることので、

イエスス ハリストスは、この詩を今の出来事にあてはめて丁度『汝等は今余が小兒らの讃頌を受けたのを以て、余を耻づべき者の様に謂ふけれども、汝らこそ耻づべきである、何となればこの小兒らは各々其正直な無邪氣な口を以て余をメシヤ（ハリストス）と認めつゝ、上帝を讚美するのに、却て汝らの様な大人學者たる者が上帝のメシヤについても、聖書ををしへについても、何も分らぬとは、豈小兒らに對して耻づべきではないか』とのいみを仰せられた様なものです。

それから主イエスス ハリストスは、續いて聖堂に止まりたまひ、堂中の不規律になつて居ることについての整理、即ち神聖なる祈禱室を利慾的市場となして居る商賣人らを逐出して、上帝の堂を清める爲に、大整理を行はれました（福音書中、マトフエイミルカの二人は、此コは其翌日のやうに記した、大かつ前二記の方が正確でしやう。然るマルコのみ、誤といふわけではない。）。それ彼は日誌的順序に依らず、便宜上論理的關係を以て前日の出来事を其翌日の件に附記したのでしやう。）。それから引續いて衆民の教訓に従事されたやうです。而して日も既に西山に傾けば、イエスス ハリストスは乃ち聖堂をお退きになつたのみならず、イエルサリムの城をも御退きになつ

て十二門徒と共に、又ビフアニヤに一夜をお明しになりました。それは此日は管にイエルサリムの爲に重大な日であつたのみならず、全イスライリの後の神靈的イスライリ（即ち異邦人にしてハリストステアニンたる者）の爲にも、いと重大な日ですから、主の御心遣ひと御身の疲勞とを來したことは、仲々容易ではありません、故に彼の雜沓をかけ難れた親しい友だちの内に、放寛いで御憩になることの必要がありました。

此時分に イエスス ハリストスの門徒らは、此大事件について何も分りませんでした、只彼らは主は此通りにして御自分のメシヤたることを御公表なされた上は、今度こそいよゝ遠からずイスライリ王となりたまふであらう、さうなるご我らも其光榮なる侍従となり、大臣顧問官となりて萬民の上に瞻仰せらるゝやうになるだらうと夢のやうな妄想を抱きました。故に聖福音者イオアンは『當時）門徒は初め此を明かにせず』と云ふて居ります。けれども又『門徒は）イエススが光榮を受けた後に、此事はすでに録されて彼を指し且つ衆民は果して此を彼に行ふたといふことを憶ひ出した』といふて居ます（イオアン十）の

づれ救世主は、ビフアニヤの親友にやどら給ふた。此夜も、涙の溢るゝ祈禱と門徒らの妄想を排く教訓とお務めに成たでしやう。

初め主イエス、ハリストスの彼盛大なる威榮を以てお入りになつたことについて、城中のものが大に驚き竦動したのは、固り多く他の國々から來た參拜者の中であつたでしやう故、是位な驚きは固り當然でしやうが、イエス、ハリストスの敵なる不法議會の者ども、もの驚きは、まだ仲々人民の竦動どころの者でありませぬ。其は先に一回極刑たる死罪の合議を興へたおたづね者の被告人が、突然自らしかも彼様な盛大な勢を以て彼ら議會の面前に出で來たのですから、而して終日上帝の聖堂に陣を構へて自分の意のまゝをなし終て悠々と元の宿に凱旋したのですから、固り其驚きと周章狼狽は彼らの爲に無理ならぬことです。凡そ其身に死刑の缺席裁判を受けた者が、潜伏地から名乗出ると云ふことは、世に幾んど例のないことですが、況て威儀堂々と赫々たる大勢を以て出ることには、大かた謀反人どもの外ありませんまい。然るにイエス、ハリストスのは、謀反人の様な兵器も金穀も何

もない、之に反して其敵黨なる議會は、強大なる勢力と職權とを持ち、捕吏と兵卒と其他必要な強行力を容易に使ふことができる者です。然るに此日全會イエス、ハリストスの御身に對して指一本の制裁をも加ふることのできなかつたのは、如何いふ者でしやうか。是れ即ち何事も全權者なる上帝の許さぬ間は、如何なる大惡、強力と雖も、何もすることができぬといふことを見るに足りません。善の力は眞實に大なる者、惡は強く見えても其實全く無力の者であるといふことを見るに足りません。強猛なる敵が、此日怒りと憎みにたへないで、イエス、ハリストスを捕縛せうとしたけれども、其が全くできなかつたのは、一方に人民を恐るゝとはいへ、其實はイエス、ハリストスの赫々たる無形の威徳に恐れたのです。あゝ善と正義の力の如何に強い者であるか、こゝで未だ分らぬならば、此少し後の夜、イエス、ハリストスが、大勢の兵隊や捕吏に向て自ら名乗て從容と逮捕につき給ふ時のごとを考へて見るがよい、『我は汝らの尋ぬるイエスである』てふお言を聞くと、此大勢は、慄然後に退て大地にどうと跌れたでありませんか(イオアン十八)の六に詳。凡そ其の逮捕も

鞭撲も凌辱も棘冠も十字架も死刑も、恒忍至仁の上帝が人類の救ひの爲に許したればこそ悪敵が之をなすことができたのです。然るに今や主が捕はれ給ふには少し早い、そこで主の無形の防衛は溫柔にして百萬の大敵にも當ることができました。

敵は至極残念に思ふた、遂に彼らの内には同士攻撃をはじめました。即ちファリセイの輩は、長老らに不服を述べて申すに『お前らは、一体何をして居るのであるか、御前らの仕方があまり手ぬるいから何の益にも立ぬといふことを知らないか、視よ世の中はみな彼（イススハリストス）に従てしまふたではないか』と、此らの苦情に刺戟されて今まで茫然として居た敵黨どもが、いよいよ果斷の舉に出で、彼（主ハリストス）を捕ふる様になるのは、尙ハリストスが彼らの亂れに對して御身からも果斷の舉をなし給ふた事（聖堂の大整理）に次ぐに、果斷の告戒と嚴責をなし給ふた後にあります。

光榮なる主イエススハリストスは、神靈的王者である故、これまで舊約の預言には、屢々王といふ言を以て彼れのことを述べられ、如何にも彼れメシヤ（即ちハリストス）は至尊

至大の王たる権力と光榮とを有てお出でなされるやうに象られて在りました。そこで上帝の智慧に遠ざかつた多くのイウデア人等は、彼れメシヤを丁度斯世の王の様に思ふて甚しい妄想を以て待ちました。されば我らの主イエススハリストスは、務めて此妄想を排く様に其教と行ひとを以てお務めになりました。或時は僅か五つのパンと二尾の魚とを以て、大勢の五千人の従者と門徒とに與へてまた澤山あまるほどの奇蹟を行ひ給ふた所が、大勢の人々は、大に驚き感じて、此こそ『我々が今まで待設けて居た誠に世に臨むべき預言者である』と申して、遂に『イエススハリストスを擁して之を立て、王と爲うと欲しました』所が、主イエススハリストスは、決して彼らの望みに従はないで、此人間中の最上至尊なる王の位に立られることを『免れて御身は只ひとり山に行かれました』（イオアン福音六）其他萬事此様な仕向を以て御身自ら此世の尊敬を斥け給ふた所の主が、今や自ら王者の如き尊敬を受けて『ダビドの子にオサンナ』の歡呼を受けつゝ、いと森嚴にしてイエルサリムに御入りになられたのは、如何いふわけでしょうやうか、一寸考へてみると、イエススハリストスの從來

のありさまと、今日の有様とは、まるで衝突する様に思はれます。そこで故らにハリストス教に敵する所の曲學者どもは、此様な所を捕へてつまらぬ妄説を吐くこともあつたのみならず、第一、稍智慧あるイウデヤ人にも『イエスス、ハリストスは、よし世のイウデヤ人らの妄想する様な肉體上のイウデヤ王でないとしても、兎に角我ら選民一同の待設けた望みに應じて實に御自分を斯世のイスラエリ國王と宣言して其先祖ダビド王の位を復興する者であるだらう』と思ふ様になりましやう。けれども皆是れ妄想です、まづがひです。真正のメシヤ救世主たるイエスス、ハリストスは、決してこの世の王ではありません、只一部に偏する地上のイスラエリ王ではありません。かれが多勢の人民に歓迎せられて天地に轟く『オサンナ』の聲の中にイエルサリムに御入りになつたのは、やがて此聲は『之を磔にせよ、之を磔にせよ』の聲にかはるといふことを知りつゝお入りになつたのです。『視よや、我らはイエルサリムに上り、人の子は祭司諸長と學士とに賣渡され、彼は之を死刑に定め、十字架に釘つ……』との預言は、もはや明かに十二門徒に御告げになつた通り

です(マトフエイ廿の十、十九に詳)。左様もはや此通り、主の心事は明かです。さればどうして主は、當時に彼様なにぎやかな歓迎をお受けになつたか、どうして今數日の中に殺されるといふ大難の迫てゐる間に、彼様な莊嚴な光景を以て御入城になつたのでしやうか。イウデヤ人の此舉は、固り彼らの愛國的快感に出でたのである、けれども主は只これだけの理由に因て特に其素志に反する此世の王國についての妄想を養ふ様な行爲をなされる筈はない、乃ち此には別にいみのあることで、前申した様な曲學の惑ひは今でもないと云はれませんから、左に其の眞意のある所をおはなし申しましやう。

我らの主イエスス、ハリストスの此行は、イスラエリ民にメシヤ救世主を知ることにて一の推諉をすることができぬ様に公然彼民に御身のメシヤ救世主たることを宣言し給ふが爲です。主イエスス、ハリストスは、固より一イウデヤ民の爲ではない全世界悉くの人類の救主ですけれども、上帝は特に其聖旨に依てイウデヤ民を選民(イスラエリ)と定められ、主はイウデヤ民の中にお生れになつて救の道はイウデヤから始まるべき者でした。

而して主はサマリヤに行くよりも、他の外國に行くよりも、先づ第一にイスライリの迷へる羊に行くべきことを其御弟子がたにも命じ給ふたことがありました。してみれば世界萬民の救主は、先づイスライリ民に向て御自分のメシヤ救世主たることを宣言し給ふのは、最も當然の順序です、殊にその頃イウデヤの民間には、縦令妄想を混じてゐるとは云へ、又其中に幾分か眞理を含む所の傳説がありましたして『メシヤ救世主の現はれ給ふ時は、非常に森嚴て我らイウデヤ民は假令全地に散別れて居てもみんな其尊き御現はれを知ることが出来る』と信じて、各々熱心に待てゐました。他の國々ではメシヤのことを待つどころではない、全く眞の造物主さへも忘れて偶像をおがんでゐたのに、ひとりイウデヤ人だけが上帝造物主のことをよくおぼへて夙夜其兼て約束された所のメシヤを待てゐたのは殊勝です。故に今は特に彼らの前にひろく周知する方法を以て現れ給ふのは、最も上帝の仁慈を施すに付て必要です。最もこれまで主がメシヤ救世主であるといふことは、特に其降孕の初め天使を以て至聖童女に報せられ、續いで御降誕の際、ビフレエムの牧者に報せられ、主が

其公務に就くのはじめ、イオルダンに於て父と聖神の證據を以て示されたのみならず、其後さまざまの場合に於て、お示しになつたことはありますけれども、此らは大概少數のイスライリの一部分に對する狭い宣言でして、未だ多數のイスライリ全部に對する公然の御宣言はありませんでした。其はまだ時が到らなかつたからで、いよ／＼其然るべき時が到つたならば、勿論主は御身自ら我こそ諸預言者の豫告した所のメシヤ救世主であるといふことを公然御宣言なさらねばなりません、さて其時すなはち上帝がお定めになつたメシヤ——ハリストスを發表すべきもツとも適當の時は、何時であるかといふに、乃ち此御入城の時でした。かの嘗てイスライリの熱心者僞善者打混て主に向ひ『爾は何時まで我らをたゆたはせ給ふのですか、爾が若しも眞實にハリストスであるならば早くはツきりと我らにさう言てくだされよ』と(イオアン十の)三十四に詳)、短兵急に迫つた質問に對しても、主は只『我は曾て汝らに言ふたけれども、汝らは信じない、我が我が父の名を以て行ふ所の諸行は我の爲に證據をなす云々……』と答へ給ふたことの外、別に公然と彼環り立てる多勢のイウデヤ人

に向つて、御身のメシヤ——ハリストスたることを御宣言になりました。けれども今や實に此様な質問に明瞭と答ふべき時です、今こそ彼此とたゆたふ多くのイウデヤ人の疑ひを解くべき時が来ました。其故に主は溫柔にして平和なる神靈的王者の威儀を以ておごそかに彼ら多勢の前に御身のハリストス救世主たることを發表されたのです。彼聖使徒パウエルが『上帝の永能と、その神體とは見るこゝとができぬ、けれども天地を造られた以來、其造物を見て知ることが出来るから、衆人は誰も上帝を知らぬと云て推諉することができない』(ローマ書一)と申し通り、イウデヤ人は『イエススハリストスが終に御自分のハリストス救世主であるといふ御宣言がなかつたから、それで知らない』なぞといふ推諉をすることができません。なせなれば今や實に此通りパスハの大祭について諸方から寄集つて来た無数のイウデヤ人の前で、此通りおごそかな光景を以て御身のハリストス救世主たることを御宣言になりましたから。斯第一に、イスラエリ衆民の前に主が眞に御自分を御發表になつたのは、主が今日御入城の一大目的でした。而して斯直接に御示しになつたの

は、彼當時イウデヤ人だけの前でした、けれども之と同時に、精神的に(獨りイウデヤ民のみならず)あらゆる異邦人全世界萬々億兆の人類に御身のメシヤ救世主たることを御示しになつたものであるといふことは、多言を要せずして分ります。なせなれば異邦人も亦信仰に依て太祖アウラムの子となることが出来ます、萬民皆精神上イスラエリです。而して主イエススハリストスは、特に其御門徒に命じて福音を普天下に傳ふることを務めさせられてありますから。されば我らも宜しく至誠潔淨の心を以て手に枝を執て、主イエススハリストスを我が靈魂の堂に歓迎すべきです。たゞに枝ばかりでなく、手に蠟燭を執て歓迎すべきです。即ち暫く後に恐ろしい仇の黑暗に陥らぬやう我らのたましひを明く照らすところの聖なる蠟燭(信仰を以て受くる上帝の光明)を執て、——我らの主イエススハリストスの前に「オサンナ」を唱ふべきです。

上帝と人との二性を有ち給ふ主イエススハリストスは、我ら人類の救ひを成すが爲に、又三つの役を有てられます。即ち預言者と司祭長と王との三職です。主は實に預言者とし

て我らに上帝のことを教へ、司祭長として我らの罪の爲に贖ひの祭りを獻げ給ふのです。が、これだけでは未だ足りません。も一つ魔の國を打滅ぼし、死と地獄に勝て、我らの爲に天國に入るの門を啓いてくださるには、王といふ役と大權とが必要で、勿論王は其上帝の性では初めから永遠の王ですが、人性でも上帝聖神に嘗つけられて王となられました。(行傳十の卅八、)此の王とは、決して斯世の王ではない、主が自ら「我が國は斯世に屬せず」(ルカ一の卅三、)と宣ふた通りです。そこで主の森嚴なる入城は、一寸皮相にみれば、斯世の王の様に思はれたでしやうが、主は此行を以て、此世の王どころではない、全く之に反して神靈的王であるといふことを悟らせ給ふのであるといふことは、確に具眼者には認められます。只若い驢に乗て歡聲沸く如き萬福を唱ふるイウデヤ國民に迎へられ伴はれ給ふ威勢の光景は如何にも彼一國一種族に限った此世の王の様です、これだけはイウデヤ民が預言の誤解に色々な妄想を以て待設けた彼らの感情を満足させたことのやうです。けれども此が、どうして其反對なる眞意 即ち 此世の王でないといふことを示すかと申せば、其は主の身邊とその一隊のやうすを一望すれば、直に分ります。乃ち主の御身は、只溫柔なる若驢の上

に在るばかり、而して古への預言に所謂溫柔の王、平和の王たることを認めらるゝばかりです。御衣は質素な通常服を召給ふばかりで、別に袞龍の御衣もなく、大元帥の軍服でもなく、笏もなく、黄金の帝冠もなく、隨行者どもは只貧賤の十二門徒ばかり、其他は任意に厚意を表する人民だけのことです。世の中に實際王者の行幸に見る所の一の鳳輦もなく、一の龍車もなく、一の武器もなく、一の兵隊もなく、全く一の鹵簿肅々たるまねをも見ることはできませんでした。これでどうして此世の王者と見えまじやうか。是れがどうして眞實に此の世の國に野心ある示威運動と云はれまじやうか。故に當時彼の國家の秩序とか政治の安寧とかいふ警戒に抜目ないローマ政府の警察も、兵隊も、全く主の斯行に何の注目をもしなかつたといふことです。これ睿智の主は、かねて預言の文句について誤って居るイウデヤ人に對して今其預言の實行を爲し給ふに當り、少しでも彼らの妄想を増長させることのないやうに至極上手に行はれたのです。若も是時主イエスス ハリストスに一片

の野心でもあつたならば、直に大勢の従者の中から富人や有力家を呼出して一言命令を下し給へば、澤山の兵器金穀と一切の軍用品は立どころに備はりませう。けれどもそのやうな企ては、夢にもなく相かはらず貧乏な『人の子のお姿』であらはれたまふたのは争はれない事實で、これこそ主は、到底イウデヤ民の迷へる興望に應ずることができないで、メシヤ王國は形而上に開かるべき者であるといふ眞意を實行の上に宣言し給ふた者でなくて何でありましやうか。

我らの主イエスス ハリストスが、イエルサリムにお入りになつたのは、以上申したとおり全イウデヤ國民の前に御身が神靈的王たるメシヤ救世主であるといふことを公報するがためでした。けれども其終に結局至重至大の目的は、是のパスハ大祭を機として眞の『上帝の羔』として世の罪から人類を贖ふのいと大なる祭をさへ給ふことにありました。――其は主イエスス ハリストスは、何故これまでにはやく御身のハリストス救世主たることを公然御宣告なさらずして、特に漸く其聖職の終期に迫つてから甫めて公然是ことを御宣言

になつたのだらうかといふ疑問と一致してこゝに審明することができません、『視よや人の子はイエルサリムに上り、祭司諸長と學士らに賣渡され、辱められ、撲たれ、死刑に定められて、十字架の上に殺される』といふことは、もはや毎度主の口つから其親しい御門徒に御漏しなされた一大事です。即ち世界萬民に代りて罪の贖ひの爲に死に渡されるが爲に、イエルサリムにお入りになつたのです。故に最も主を思ふの熱心なる聖使徒ペートルの如きは、主をイエルサリムに入らせさへせねば、安全であらうと思ふて、彼をハオル山に留めうとしたことがありました。けれども世の始めから屠らるゝことに定まつた『上帝の羔』はごうでも屠所なるイエルサリムに行給はねばならぬ。而して主の反對黨なるシネデリオンの輩は、これまでもはや主を死罪に處することを議決して居たけれども、未だ其機を得なかつたのが、今や彼惡黨どもが當の敵なる主イエスス ハリストスは、御身自ら此においでなされかつおごそかな風采を以て御身のハリストスたることを御發表なされたに由て茲に愈々無罪の主を誣て殺害せうと企つる所の決心を堅めました。乃ち主は一方に全イウデ

ヤ民に、御身のハリストスたることを御しらせなされたといへども、一方に飽くまでも頑傲不信の彼らは、此おごろかな御しらせに依て、主をハリストスと信じないのみならず、却て嫉みと怒りとの念を燃して、いよく其不法無道なる敵對をはじめます。主が御入城の結果は、必然かうなるといふことは、固り御ぞんじです。御ぞんじであるから此通りにして御入りなされたのです。そこで主イエイススハリストスが、今までは御身のメシヤハリストスたることを御公言なされず動もすれば御門徒を戒めて御身のハリストスたることを人に告げるなど口止めなされたこともあつたのが、今や自ら進んで之を御公言なされたといふわけは、別に多言を要しません。其は死ぬる爲です、贖罪の爲に死ぬる時が来たからです。若も主イエイススハリストスは、初に之を公言することの利益を認め給ふたならば直にはやくなされましたらう。けれども其では何の利益もなく、反て害になるといふことを知ておられます。なせなれば上帝の子ハリストスの此世にお降りになつたのは、人々に救ひの道ををしへ給ふがためであるのに、未だ其教もよく行届かず地上に上帝の國を開

く何の用意もできないのに、逸早く御身のメシヤ救世主たることを公言するならば、彼多くの悪敵どもは、すぐに不潔の憎しみを以て主の生命に危害を及ぼす。危害は固り主の覺悟する所であるけれども、それではとてもイスライリの迷へる羊を招く所の大使命を果すことができません。然るに主は今や其大約三年間の傳道に依て、御身の地上につとむべきことを務め畢り、救ひの道の設備も出来たから、此上は愈々最後の最大聖務たる贖罪の犠牲をさし給ふ時機が近づきました。故に斯く堂々といと莊嚴にイエエルサリムにお入になつたのです。

而して是日、主はイエエルサリム城門の前に駒をといめて、彼形には美しき都の景色を眺めつゝ、『今は尙汝の日である、若も是日に於て汝の平安にかゝはることを知らば福なるに今は汝の目に隠れてある云々』と測られぬ深き情の聖心から熱き涙を以て仰出されました。(ルカ福音十九の四)此通り『是日』は、イウデヤ民の爲に非常に重き大事な日でごさりました。それは彼らがいよくハリストスを承て救はれるか、拒んで滅ぶるか、二つに一つを撰ぶ

べき「死ぬか、活るか」の境界あるのに、彼らは無知頑固にして、生命の主を拒んで滅びの方を撰んだのは、如何に憫むべき不幸でしやうか。此様な重大な いみある日であれば、たとひ彼敵敵フアリセイ輩の小言に従ふて主の御門徒たちは 大聲朗唱の號呼を止めても、無心の石が大聲に號呼ぶやうになりましやう(九の福音十)併し此様な重大な日は、獨りイウヂヤ人ばかりに在ったのではない、其後の我らにも心靈の上にはあります。乃ち今は實に我らの爲に救ひの日です、我ら日本人も實にハリストス救世主を承て救はれるか拒で平安を失ふかを決すべき時です。今壯健であるから大丈夫だとか、我は財産が澤山あるから救は必要でないとか、放言して宗教上に極めて冷淡なのは甚だ不幸です。又我は未だ若いから、前が長いからと思ふて救ひに就くのを前へ前へと延ばすのは、殊に危いことです。思へば人生は實にはかない者です。我らもイウヂヤ人に鑑みて須く是日が我らの平安にかゝはる一大事であるといふことを悟り、切實の信仰と痛悔とを以て靈魂の善き計をしなければなりません。

嗟々是日が、此の一生の今が、我らの爲に平安にかゝはる最も大事の日です。靈魂の救ひのことは、人間の爲に實に一日も一刻もはやく急ぐべき大事件ではありませんか。若も第一の降臨に於て、人々を招き給ふ時に、光榮の王に救ひを求めなかつたならば第二の降臨に於ての光榮の王は畏るべき審判者として我らは永遠の滅びに陥るばかりであります。

〔三〕 光榮の王——聖神。

天の父が光榮の王である通り、父の子イイススハリストスが光榮の王である通り、父より出づる聖神も亦同じく光榮の王であります。此事は我ら信者の爲には、祈禱文に聖神を名づけて『天ノ王、憺恤者』と申してあることだけに依ても、確かであります。聖神は一に成聖者と名づけられます、其は我らに成聖の恩寵、即ち其恵み佑けを以て我ら罪人にハリストス救世主の功徳を實際に領けさせて我らを罪から浄め、上帝の前に義なる者とならせて下さるからであります。聖書に此事を明して『我等ノ主イイススハリストス

ノ名、及び我等ノ上帝ノ神ヲ以テ洗ハレ、成聖セラレ、義トセラレタリ』
 と申してあります(コリント前六の十一)。そこで我らは救ひの爲に、天の父を呼び主イエス ハリス
 トスを信ずると偕に、上帝聖神を呼び、其恩寵を待むことが、最も急務であります。なせ
 なければ上帝の恩寵は、先づ我らの心を啓いて、天の父を認めさせ、我らの智慧を照らして
 主イエスス ハリストスを悟らせ、我らの力を佑けて、凡ての誘ひに勝て上よりの力に向は
 せ導く爲に、總て聖神を以て其恩佑を授けて下さるのであります。若も此恩寵がないと云
 ふと、我らはとても天の父を知ることが出来ず、主イエスス ハリストスの上帝たることを
 認めることも出来ません、聖書に『聖神ニ依ラザレバ、一人モイエススヲ主ト
 稱フル能ハズ』と申してあります(コリント前十二の三)。未だ斯教を信じないお方は、何だか怪し
 く思はれるかも知れませんが、萬事信仰に在ります、先づ信仰を以て上帝聖神の恩寵
 をお求めなさい。正直と謙遜の心を以て、先づ上帝を信じ、其憐みを願ふならば、天の父
 は必ずあなたがたに聖神を遣はして其眞理を示して下さいます。其親切なる教師は必ず主

イエスス ハリストスの事を教へて、あなたがたの心に善くお分りになる様に佑けられます
 之に付て慢心は大禁物です。どうで二十世紀の學問ではまだ天の星のこともさッぱり分ら
 ぬのが多いでしやう、地の塵の原子のこともさへも得心の出来る様には分りますまい。たど
 い二十世紀が三十世紀と成ても四十世紀と成ても、天体との交通は不可能のことです、人
 間の死を廢することは出来ずまいされば、我らが今までの學問を以て、上帝様のことを
 試験したり聖神のことを解剖したり何かすることが出来るわけもありません。我らが上帝
 を光榮の王と申すのを聞いて、何だか漠然たる者ぢやと思ふ人もありませう、固り目の見
 えなない人には、何國かの皇帝によし拜謁が出来た所で、自分が見えなないから、疑へば其れ
 までいあります。イウデヤ人は主イエスス ハリストスを目の前に見ながら、之を疑ひまし
 た、乃ち見ないも同然で有たのです。是に反して、信仰を以て心の目に悟る人は、たとひ
 肉眼に見なくとも、其靈魂には、今でも上帝を見ることが出来ます。其には先づ信仰を以
 て心の曇りを拂ひ、清き心を以てすることが何よりです、上帝の言に——光榮なる王の言

269
63

に申されてあります。

『心ノ清キ者ハ福ナリ、彼等ハ上帝ヲ見ントスレバナリ』(マトフエイ
五の八。)



K-4

明治四十五年二月廿七日印刷
同 年三月十一日發行

*** 定價金五錢 ***

東京府北町島郡瀧野川村大字田端三十六番地

著作兼發行
兼印刷者

水 島 行 楊

東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地

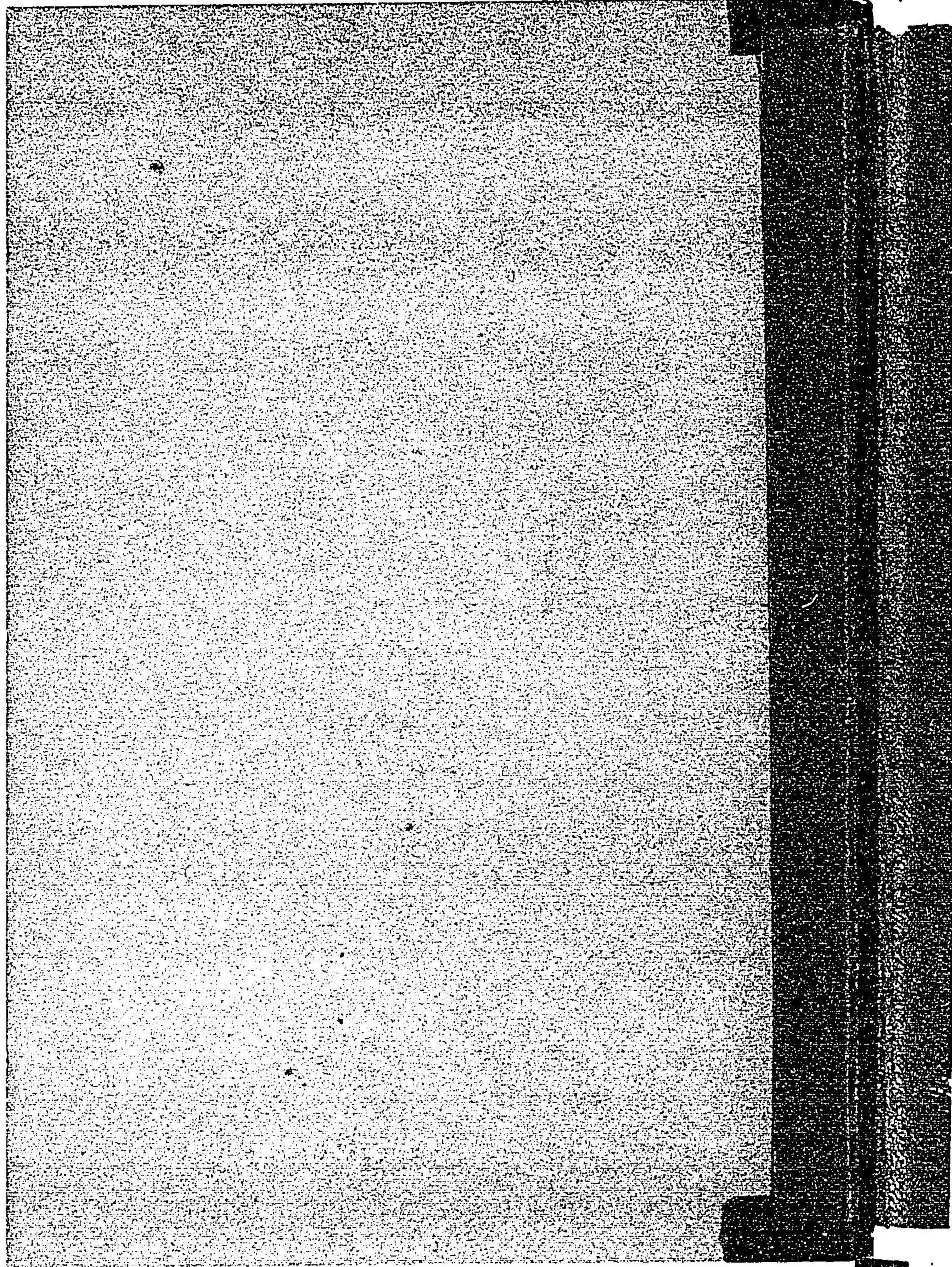
正 教 會 事 務 所

電話本局二五六九

發 行 所

新 刊 廣 告

- 萬物の靈……………全一冊……………定價金六錢、郵税_{二冊}二錢
- 天地の公道……………全……………價三錢五厘、郵税_{三冊}二錢
- 定罪を避くる法…………………………價三錢五厘、郵税_{三冊}四錢
- 大阪生神女庇護聖堂…………………………菊假綴特減五十五錢、郵税六錢
- 松山ハリストス復活聖堂…………………………菊假綴四十五錢、郵税四錢
- 東京ハリストス復活本聖堂小誌…………………………四六判價金十錢、郵税二錢
- 安和の宗教(人生の平安幸福の道)…………………………價金五錢、郵税_{三冊}二錢
- 吾人は何故に宗教を要するか(再版)…………………………價金三錢、郵税_{四冊}二錢



9
4

通俗正教
傳道小書 光榮の王

国立国会図書館

020618-000-2

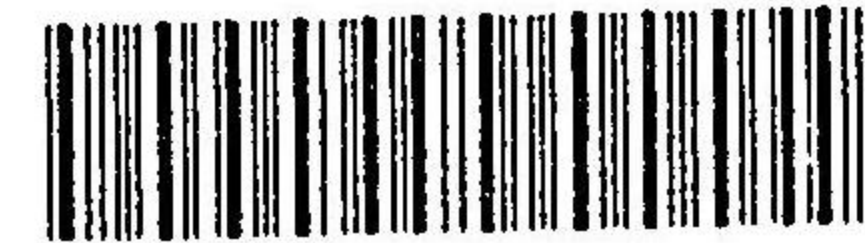
特49-814

通俗正教伝道小書光榮の王

水島 行揚 / 著

M45

ABI-0433



特

8